《座談会》

同志社教育を考える

出席者（ABC順）

大学神学部教授　遠藤彰

香里中・高教諭　高松宗吾郎

女子大学教授　武邦保

大学法学部教授　八木鉄男

（司会）住谷磬（大学文学部教授）

住谷　どうもお忙しいところをご出席いただきまして有難うございます。きょうは同志社の教育を考えるという座談会をさせていただきます。が、日本の教育の現状は考えてみれば、たいへんむずかしい問題を抱え込んでいます。同志社の現状を見ましても同じようなことがありますし、同志社は一〇〇年以上の教育の大きな伝統をふまえた学園であり、またいまは幼稚園から大学までという非常に広い、各年齢に応じた教育を行っているなかで、日本の教育のむずかしい問題を全部同志社はしょい込んでいるようなものだと思います。これからの同志社はどうあるべきか、われわれも日常考えているわけですが、忌憚のないところを各先生方にお話し願いたいと思います。最初に八木先生のほうから順番に――順序不同です。考えておられることを自由に述べていただきたいと思います。

八木　同志社の教育といいましても、やはりわが国の教育の一環であることは、いま住谷先生がおっしゃったとおりで、そういうものとして同志社の教育を位置づける必要があると思います。と同時に一方ではそのなかで同志社の教育の特色を考えねばならないと

思います。これはもちろん長い伝統のなかで培われてきたものでもあるし、もともとの建学精神でもあるわけですが、ではそういう同志社教育の特徴というのはどこにあるのか、わが国の教育全体のなかで、その特徴がどういう位置づけをもっているのかというようなことを、いま一度考えなきゃならんのではないだろうかというふうに思いますけれども。

住谷　同志社独自のユニークなものが伝統的に培われてきているから、その辺を少し考えてみたらいかがかということですね。たしかに同志社教育を語るときには、日本の教育プラスアルファがあるので、そこのところを重点に話し合いすればよいわけですが、これがなかなかむずかしい。

高松　現在の中学・高校教育の問題は、どうも社会的に見て非常に問題の多い時期にかかっているのではないかと思うんです。たとえば高等学校の教育というと、年配の方々は昔の旧制中学というイメージが強いのではないか。私は現在の高校教育は、もっと幅の広い視点に立った教育だと思うんです。そういう意味で高校教育と中学教育を、われわれ日本人として、ここであらためて見直さなければいけない時期にかかっているのじゃないかと思います。中学・高校教育が、現在では高校なんか九十何パーセントが進学する時期になっていますから、実際にほとんど義務教育化しているので、この問題についてもっと突きとめないと、なにか特別なふうに考えたのでは誤りではないかと思うのですけれども。

住谷　中・高時代はいちばん人間的に成長する時期でもあるし、それをどう考えるか、たいへんむずかしい問題だと思います。

遠藤　いまおっしゃったこととダブらないようにしますが、そういう状況のなかで、同志社が幼稚園から大学院まで、小学校は抜けていますけれども、一貫教育をめざしてやっているわけですが、いつも問われることだけれども、その一貫教育の内容はどうなのかということを、ここで一ぺん洗い直したい。キリスト教主義の教育という、建学の精神に根ざすところの同志社教育の根幹と考えられるもの、そういうものを、一貫的にどう受けとめ扱っておられるか。それからもう一つの柱は国際主義ということですが、これも旗は掲げられているけれども、実際はどうなのかということで、この二つにぼくは焦点を合わせ

置いて考えてみたいと思います。

住谷　これもまた、同志社独自の古くて新しい問題が出てきましたね。

武　私も、いま遠藤先生と八木先生がおっしゃいました、建学の理念といいますか、建学の精神というものが同志社教育を考えるというときは当然出てくる、いつもやはり原点にかえるといわれます。そしてそこにふるさとを持っていなければいけないと思うんですが、それだけではなくて、二つの点を、私にお教えいただきたいのです。一つは、同志社の教師論というのがあっていいんじゃないか、同志社教師というひとつのパターンがあっていいのではないかということです。もう一つは、日本の一私学という状況のなかで、司会の住谷先生が言われましたような、いわゆるマスプロ教育に示される経営の問題を含めて組織の巨大化とそれに伴う合理化といいますか、そういう教育の内実にかなりかかわってきていることがあると思うのですね。これに対し国庫補助の問題がすぐに出ます。しかしここにも別に行政機構の肥大化という問題が出てしまってきているかと思います。それは、豈、同志社の問題のみならんや、ということなんですけれども、そんなことを思います。

武　邦保氏

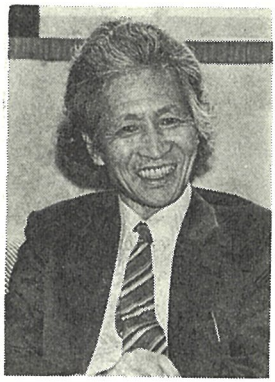
住谷　同志社教育そのものの問題と、学校経営や管理組織や行政のむずかしい問題も出たけれども、同志社の特徴的な、いまおっしゃったような一貫教育の問題にも関係しているほかの学校となにかちがうような同志社独自の教育の理念といいますか、その点一つだけに焦点を合わしてご意見を承りたいと思います。

八木　実際にもうちょっと具体的に考える必要があるのじゃないかと思います。たしかにキリスト教主義教育といえばそうですが、それだけでは実際の内容がそう明確じゃないんですね。大学の場合、とくにそうですが、さっきもおっしゃいましたように、これだけ規模が大きくなってくると、きめ細かい教育といいましても実際上困難な状況があるわけです。ですから、そのなかでどこに焦点を置いて教育ということを考えていったらいいのかそしてどういう人物を社会に送り出すのか、どういう人を教育でつくり上げてゆくのがわれわれの責任か、そこのところを少し具体的に考える必要があるのではないか。

そう考えますと、これはいままでの同志社には自由というひとつの伝統がある。そういう点から考えましても、各人の個性を自由にのばすことが目標になるかと思います。とくに、みんな人間が平均化されてきている時代で、しかも一方では入学試験が非常にむずかしくなってくる。そういう状況のなかでなにかユニークな、あまり平均化された人間でない、あるときには型破りであっていいと思うのですが、そういう人間が必要なのではないか。そのためには、やはり各人の個性をできるだけ抑えずに伸ばすということが必要なのではないか。これは同志社の自由という伝統とも結びついてくるので、できるだけ個性を伸ばす、それがひとつのポイントになるのではないかと思うんですけれども。

住谷　一人一人の学生の個性をいかに伸ばし得るかという、日ごろの教師としての目的みたいなものですね。

高松　キリスト教を徳育の基本とする以上私は現在の中学生でいちばん欠けているのは何かというと、徳性といいますか、徳に対する考え方が非常に甘いと思うんです。心がすさんでいるという感じを受けるのですが、これは小学校以来の塾の教育というのが、やはり塾ではそういう教育はできないと思うんです。徳性を重んじ、礼儀正しいといいますか物事に温かい気持ちをもった人間を育てたいということを、私らは中・高教育に携わる者として常々考えておるわけですが、ほんとにいまの子供は、考えていることが大人のわれわれではちょっと想像できないような飛躍といいますか、そういうところが感じられるので、もっと温かい個性の豊かな人間を育てたいという気持ちがいたします。



八木　鉄男氏

住谷　同志社の、先生がおっしゃるような期待する教育と実際の現実とに大きなギャップが存在し、そのために子供たちはむしろゆがめられているという気がするのです。これから同志社が社会に向かって、同志社の理念をむしろ強く押し出していくということが必要ではないかと思いますね。

遠藤　八木先生のおっしゃった、個性を伸ばす教育というのは、キリスト教主義教育でも多分中心的なところだろうと思うんですけれども、新島先生以来、そのことは同志社教育では強調されてきて、現在でもそれは、曲がりなりに同志社の学風のひとつの特色になっていると思うんですが、この点をさらにはっきりと打ち出していく必要があるでしょうね。というのはいまの教育界の現状といいますか、社会の現状からいうと、個性を生かすことができないような画一化の傾向が極めて強い。みんなそのなかに巻き込まれて、教育をし、教育を受けているという現状であって、そこから生み出される人間というのはまことに無個性的であり、自己中心的であり、自己抑制のきかない人間であり、おしなべて没理性的な大衆のなかに埋没しています。

そこで、ある若者たちはとにかく目立ちたい欲望をもつのですが、そういうふうな個性的な形でない目立ちたがる傾向というのはたいへん憂慮すべきことだと思うのですが、同志社教育というのはそのちょうど逆のところに重点を置いてやってきたし、これからもやらなければならないと思うんですね。

個性的なものが強調される場合、その底といいますか、根本というか、それは何だろうかということをさっきから考えているんですけれども、自分に与えられているたまものを生かして、それを自分のためでなくて、他者のために用いるとか、仕えるとか、そういうところに価値を見出すということですね。これが個性というもののいちばん根本になくちゃならないものではないかと思うのですが、そういうことは、もちろんほかの学校でも違った形でおそらく言っていることでしょうけれども、同志社ではそういうものを与える動力になるものはキリスト教主義だというふうに、少なくとも私はそう考えております。キ

遠藤　彰氏

リスト教主義といっても漠然としておって、いろんなキリスト教主義のやり方がありましょう。けれども、同志社においてはそこら辺が大事なところではないか。そこで個性が開花できるというところ……。

住谷　自分本位の個性ではなしに、他者に向かう個性、社会に向かう個性ですね。

遠藤　ですから同志社人には、ソシアルラダーに乗って官界政界財界などのトップにのし上がるタイプの人間はあまり出なかった。総理大臣になった人もいませんし、財閥のボスになった人もいない。高級官僚も多くない。それよりも社会の下積みになっている人々と一緒に生活し行動し、その人たちのために働らく人間そこら辺に同志社が目ざしてきた人間像というものがあるのではないか、それが同志社的な個性じゃないかと思います。

住谷　本質的には民主的な個性ですね。従来の立身出世というか、天皇の座に近づくような意味での社会的な立身出世のはしご段を昇らないという、そういう個性ですね。

遠藤　宗教や教育や社会福祉の面でたくさん人材が出ていますね。

住谷　それこそ従来の栄誉栄達抜きの、そういう個性ですね。

武　先程の八木先生のご発言でユニークな人物をつくるということ、それを遠藤先生も同志社の立場でお話をされたわけですが、私、思いますのに、新島先生の有名な手紙のなかに、「自由教育・自治教会」という言葉がありますね、新島先生が自由教育と言った意味は、いま両先生方がお話しになってこられたものだと思うんですが、そういう個性を真に解放していく自由な人をつくる。

だから私は、そういう点で、教育のなかでゆたかでユニークな人物をつくっていく。人間が人間を本当に見て、人間が人間を尊重し愛し合っていくというような、そういうひとつの体験を、とくに中学生の段階でしていただきたいということです。合宿もする塾的教育ですね。先生と生徒たちが寝食をともにして、一緒に勉強したりスポーツしたり、そういう共同生活の教育の場がもうちょっと復活してもいいのじゃないか。いま学校は先生もサラリーマン化しているし、生徒も学校をマンションか何か、そういうようなところに出入りしている雰囲気で、テレビでない、いまひとつの教育的情報としてだけしか今や期待してない、学校に人格的なものはあまりに期待しない。そういうのじゃなくて、もっと武骨でもいいですから——そういう実験をしているのが東京の或るキリスト教系の中学校であると聞いています。その中学校の話になりますが、たとえば中学三年生が高等学校へ行く。自分の高等学校へ行く子供もいるし、よその公立の高等学校へ行く者もいる。しかし、とにかく夏休みとか冬休みなんかに合宿して、二〇人ぐらいの生徒と、二人三人の先生で、ほんとに一緒になって生活しながら、お互いに励まし合っていくというような、そういう生活をかけた教育というのがあっていいのではないかと思うんです。

そういう点で、中学校の側からご発言できる高松先生から大いにいろいろと聞かせてい

ただきたいのですが、同志社一〇六年の歴史といっても、これは中学教育の歴史でして、大学の歴史じゃないわけです。同志社英学校の歴史です。何かにつけて附属的にみられますが、同志社はやはり中学教育として出発したという事実は大事ですね。そういう中学あるいは高等学校の教育のなかで、さきほど高松先生がおっしゃいましたように、非常に深刻な問題をもっているということが、同志社の教育にかかわるわたしたち全ての危機なのです。なにかそういう生活をかけた教育、人格と人格がはだでぶつかり合って、友達のために宿題を教えてあげ合うような、環境というものができないものだろうか。大学も大学で、われわれも大いに反省があるのですが、もっと生涯をかけて勉強していくプロセスのなかでそういう環境や場ができないでしょうか。

住谷　磨氏

歴史的に言いますならば、ご承知のようにアメリカの宣教師によって援助されたり、またいろいろ協力されてつくられたキリスト教系の学校というのはボーディングスクールと言われて、寄宿舎学校といいますか、そういうものだったわけです。カレッジというのはそもそもそうだと思うのですが、そういうものはいまの巨大な機構のなかではなかなかできないし、またカリキュラムの問題等あって、そんなのんきなことはできないかもしれませんが、正常のカリキュラムのなかに少しでも、先生と生徒、学生が一緒に勉強しながら単位を取っていくような試みが、もっと同志社のなかでできないかなと思っております。

住谷　基本的には同志社の中学教育がそこからきているので、現状の中学校に関してどうだろうかという武先生のお話がありましたが、中学教育というのはまた、いちばん大事な一貫教育の初めなので、その辺できちっと同志社の教育ができておれば、それがずっと花咲くわけです。中学それ自体が問題があるし、ひとり同志社だけの中学では困るわけですけどね。校内暴力をはじめとして、日本の中学教育というものは、昔の大学紛争が中学に移ったような状況で、先生方は頭が痛いわけです。ひとり同志社中学だけがうまくぬくぬくと理想を掲げているというわけにもいかん状況ですからね。そういうふうなところを、どう同志社中学がやっていくか、高松先生にお話しいただきたいと思います。

高松　いま生徒の合宿とか、俗な言葉でいえば生徒と一つ釜のめしを食うということでたとえば私らの学校でも、運動部とか文化部なんかのクラブ活動で合宿はわりあい夏なんか実施しているわけですけれども、中学一年まで非常にひ弱い感じの子でも、その合宿の経験のある子は、それが済むと非常に力強くたくましくなりますね。先生と一緒に寝起きし、同じものを食べ、そうやって過ごすことがどんなに大事かということをつくづく感じますね。

現在のような中学生の非行化ということがいまいちばん私たちは頭が痛いのですが、幸い私たちの学校はいまのところ、そういう徴候はないんですけれども、しかしこれは、い

高松宗吾郎氏

ずれ私たちの学校もそれなりの覚悟はしてなければ、よその庭の出来事だと無視するわけにいかないと思います。いまの中学生の考え方というのが、どうも大人のわれわれには、さきほども言いましたけれども、普通のとらえ方では御しきれないものがかなりあるのは事実ですね。何か悪いことをして、それを注意していても、その注意に対する反応のしかたが十数年前といまの中学生ははっきりちがいますね。

住谷　非常に反抗的で、攻撃的というかね。

高松　反抗的というよりも、こちらの注意がほんとに心で受けとめてくれているのだろうか、という不安を感じますね。前の子は、注意すればしただけのことがわれわれのほうにあるんですけれども、いまの子供はなかなかそれがとらえがたいという面がありますね。

住谷　それはやはり考え方が、価値の置き方がちがうのでしょうかね。

高松　ちがうような感じはたしかにしますね。

住谷　自分本位ということはありませんか。

高松　そのとおりですね。

住谷　それは個性でもないですか。

高松　個性というよりは、世の中に原因があるんだろうと思うのですけれども、受けとめ方が全然こちらの頭では判断しかねるような反応がよく出てきますね。

住谷　しかし同志社中学には入りにくいですね。非常にむずかしい中学になりましたね。中学から同志社は狭き門になっちゃって、それはやむをえないとは思うのですけれども、中学のほうでは受験一本で、成績主義で切っておられるわけでしょう。

高松　そうです。それがいいことかどうかじゃ別にかわるいい方法があるかというと、これがなかなか、そういうことはできませんしね。たしかに小学校で、いろんな一行的な知識はたくさんあるわけです、何かと言えば何かというような知識はね。だけど、それがほんとに自分の体になっている知識じゃないという感じを受けますね。

住谷　そういうものが順送りに各段階にきているわけですよね。

高松　これはいずれ出るかもわかりませんけれども、やはり中学の学費の問題ですね。かなり高学費なんで、このことがさらに門を狭くしている。成績と学費の問題ですね。たとえば中学に対する国の援助なんかでも、ずいぶん甘いと思うんです。中学生の場合は、もし行けなかったら地元の公立に行けばいいんだというような安易な考え方があると思うんですね。現在の私学の、とくに高校よりも中学がいちばん大きな問題ですね。

遠藤　父兄の職種は、だいたいどういう……

高松　以前は、大阪は中小企業の商店主とかいう人が多かったですけど、最近、私は二年ほど前に中学一年を担当したんですけれども、そのときに思ったのは、父兄の層が意外に共稼ぎの人がふえてきておりますね。それ

から、いわゆるサラリーマンの方が多いですね。

住谷　まあ、一般ということですか。

高松　そうですね。

住谷　同志社に子供を進学させるという父兄の動機は、どの辺にあるのでしょうか。同志社に入れれば大学まで受験なしでずっと行けるという、その期待でしょうかね。

高松　それも当然ありますけど、しかし何らかの形で親戚なり知人に同志社関係の方がおられるというのが意外に多いですね。

住谷　同志社ファミリーとまでいえないまでも、同志社ファンが入れるのですね。

高松　そうですね。その点、われわれ喜んでいいだろうと思うのですけどね。やはり同志社を愛してくれている社会の層というのはかなりある。

住谷　私学というのはそれで半分もってますね。その魅力がなければ私学の存在意義がなくなってくるのじゃないですか。

遠藤　私の住んでいる所のすぐ近くに京都で有名な進学塾の一つがあります。生徒が登校してくる時間がだいたい夕方なんですね。狭い通りなんです。そこに親が車で送って来て終わるころにはまた迎えに来るんです。このため毎夕毎晩交通渋滞です。あたり一帯騒然とするし大変なものなんです。自分の子さえよければいいという風潮が端的に出ているんです。車の中の親は、交通渋滞も何も知らん顔で子供が出てくるまで待っているわけです。そういうところに非常にあらわれているということを感じますね。そういう家庭から出てくる子供というのが、今では一般的じゃないでしょうかね。もちろんちがった子供もいるのでしょうが、そういう子供を多く引き受けて、そこから学校教育をスタートさせねばならない。幼稚園はあるけれども。残念ながら同志社に小学校はないわけですから、子供は小学校でそういう塾へやられて、その塾から同志社の中学なり女子中に入ってくる。そこから同志社教育が始まるわけですね。

　大学のほうで言うならば、大学は同志社外から進学してくる学生が多いわけですから、いろんな学生が入ってくるわけだけれども、たとえば教室で授業を終わって、黒板の字をぼくが消しますね。学生はだれも手伝いましょうかとも言わないし、あたりまえの顔して見ているんですね。授業が始まる前に入っていくと、五講時なんかになると床が紙くずだらけになっているわけです、雑然としたところで授業を始めなければならない。ぼくは言うのですけれども、きみたち、こんなことはおかしいと思わないか、きちっとしたきれいな環境で勉強しようではないかと。そこで、みんなで片づけるわけです。そういうことから始めなければならないわけですね。

住谷　小学校の塾通いで、両親が自分に奉仕してくれているわけだから、小さな王子様、王女様になっているわけです。自分が奉仕する立場と逆なしつけをうけて成長しているわけです。これを逆転させるのはなかなか難しいですね。

遠藤　だからなかなかむずかしいと思いますけどね。しかし同志社で学んだ人たちは、曲がりなりにも同志社の伝統的なスピリットを身につけて出ていく、ということも事実です。だけど、学校はそれを繰り返し繰り返しやらねばならない。生徒や学生が、ほんとに自分をむなしくして他者に仕えていく、そういう輝き方のできる人間となって世に出て行くように、それが中学校から大学まで、それ

こそ一貫教育の目的だと思います。

住谷　それはしかし、いまの受験勉強に追われる社会の考え方と逆ですね。

武　さっき入試の弊害というお話を八木先生が出されたんですが、入試の問題をわれわれがまともにこの辺で抜本的に取り組まないと、もう教育のＡＢＣがなってなくなっているのではないかなと思うのですね。たとえば入試といいますと、今日推薦という問題が出てくるわけですけども、人を蹴落としても自分がという高度な入試技術を体得して入ると、勝利者になって、そして次のステップはまた親と一緒に計算して考えていくというので、なにかこうゲームの理論といいますか、そういうことになってしまっている。そこでは、高松先生がおっしゃいました徳性を養うとかそういうことではないので、入試がむしろ徳性とは逆な策といいますか、そういうものを養っているようなことになってしまっている。

大学のなかでは推薦制度が学部によっていろいろあるようですけれども、女子大のなかにもあるわけですが、なにかまだ同志社らしい推薦制度ではないのじゃないかと思うのですね。ときに、かなりを推薦制で入れて、そしてなかで大いにふるっていくような方向が、文部省レベルでも理解してもらえないのだろうかなと思うのですね。立教とかいろんなところで、社会人教育とかいわれて、再教育の機関として大学が蘇生している試みをしていますけれども、やはり中学校から何らかの形で、同志社はこういう学生を期待している。こういう生徒を受け入れて、こういう方向で同志社教育を施したい、それに理解と協力があるならば、何人以内来てもらいたい——もちろん出身校の保証がないといけませんけれども、そういう出身校との信頼関係を十分つけていきますならば、必ず小学校でも中学校でも高等学校でも、それぞれの上の学校にいい生徒を送ってくれると思うのですね。

現に、名前を言っては何ですけれども、大学の場合ですが、女子大も含めて、新島学園とか、そういうところはかなりキリスト教のつながりということもあって、信頼関係が校長とこちらの学長なり担当者の間でありますので、いい生徒を送ってくださるということで、学内でもそれぞれ、キリスト教主義の学校のいいものを受け取って指導的な役割りを果たしてくださる学生がいるわけなのですけれども、さきほど遠藤先生が言われましたように、いたずらに権力志向の人物を生むような学校では同志社はないのですから、むしろそういう点で、もう一ぺん同志社は型破りの学校に戻るべきで、あまりにもスマートにできすぎちゃったんじゃないかなと私は思うんです。

住谷　しかし、いい生徒を入れるというようなことも、これはやはり問題があるので、教育の本質から言ったら、いかに悪い生徒を教育するか、これが重要なので、できる子はほっといてもいいのでしょう。その矛盾も感じるのですが、八木先生、いかがですか。

八木　さっきもおっしゃったけれど、たしかに同志社独自の教育ということを考えれば、入試の問題と、一方では授業料問題、これは大きな壁だと思いますね。はいりたい学生でもはいれないという状況が二重の面であるわけですから。その点で、学校として考えていかなきゃならない時期がきているのじゃないか。同志社での教育を求め、そのなかで個性を伸ばしたいという学生が欲しいです

ね。

いま大学でやっています㊥という学外高校の推薦制、まだことしで五年目ですが、いろいろ問題はあるでしょうけれども、もう少し拡大して考えていってもいいのじゃないかという気はしますね。

遠藤　せつかくやり出したんですから、まだ始めてない学部や学科もあるようですし、もっと前向きにね。

八木　今後、ますます必要になってくるじゃないかと思います。たしか、こととしはじめて卒業生があったわけですね。比較的成績もいいようですが、それよりも個性のある、あるいは個性を伸ばすというふうなことを考えている学生がいるような気がします。みんながそうとは言いきれませんが、全体的に比較するとどうもそんな気がするので、そういう面を積極的に考えていいのではないか…。

住谷　模索の段階ですね。大学は、いまは半数ぐらいが浪人生活を送って入ってきている状況があります。そのなかでほんとに同志社に入りたいと思って来ている人もいるし、すべりどめで入ってきたのがいるし、さまざまですね。

八木　これはもちろん一般的なことなので、みんながみんなそうでもないですが、あれだけ受験がむずかしくなってきますと、たしかにはいっているのはみんな頭はいいんですね。とにかく頭はいいし、まじめなんです。与えられたことは十分にします。ところが、この本を読めと言ったらちゃんと読むのですけれども、いままでそういう習慣がないということもあるのでしょうけど、なにか自分で探してやるということになると……。自分で何かしなきゃならんとか、あるいは自分でいま、これかあれかどっちか選択しなきゃならないという場合には、そういう考え方がなにか弱いような気がしますね。

遠藤　レポートでもきちっと期限を守るとか、遅れるときは断りを言うとか、そういうことはきちんとして来てそれはそれで結構なのですが、おっしゃるように独創的な点が乏しくなり、だんだん小さくこじんまりとしてきた。この問題は中・高の教育からやはり繋がっていると思うんですけれども、それは高松先生、どうなんでしょうか。

高松　中学・高校は、提出物とかそういうことは相当やかましく言いますからね。

住谷　それが徹底してきたわけですね。

遠藤　それは結構なんで、たいへん大学のほうではありがたい点なんですが、一面において、かつての野武士的な豪傑の学生――期限は守らんわ、礼儀はないわ、それは困ったけれども、自分で何かやろうという気迫のある学生が最近は減ったんですね。

高松　だんだん少なくなりましたね。

遠藤　中・高でもやはりそうですか。

高松　そうですね。

遠藤　社会風潮の影響もあるでしょうね。中・高教育の段階で、個性豊かな人間を育てるのはやりにくい時代なんでしょうか。

高松　しかし、中学・高校はわりあい先生と生徒の結びつきというのは、大学よりも濃いと思いますのでね。担任の先生方なんかとくに生徒の個性をよく知っておりますので、そういう意味では私どもできるだけ生徒の気持ちといいますか、その個性は尊重しているつもりですけれども、また当然、そうあってしかるべきだと思いますしね。

さっき入試の話が出ましたけど、どこの学校でも同じだと思うんですけれども、その学校に行きたい、同志社で学びたいという、そ

の気持ちがいちばん肝心ですね。私どもの高校でも、ほんとは公立に行きたかったけれども、やむをえず同志社に来たというような子は、やはりなかに入って本当の意味でのびのびした勉強ができてないですね。いつでもなにか心が外を向いているような感じでね。

住谷　同志社に行きたいといって中学から来て、同志社が好きで、家族的なムードがあって、ずうっと一貫教育できている学生は明るいなあ。とても気持ちがよいです。

高松　ほんとは公立に行きたかったけど、やむをえず同志社へ来たというような子は指導しにくいですね。

八木　理想的には、同志社へ来たいという学生を全部入れられたらいいんですけどね。

遠藤　本筋はそうなんですね。ただ高松先生のおっしゃるように、行きたかったけれども同志社に通ったから来た学生も——大学の場合ですよ——四年間いるうちにやはり同志社化されるのですね。よかった、というふうになって、卒業したらものすごい同志社ファンになって、子供をまた入れるというようなことになってくる向きもあります。

高松　やはり来た以上は同志社を好きになってもらわぬと……。

武　ぼくは中学・高校の場合、やはりある生徒はそのまま上に行きたくないという気持ちもあるとみますね、ですから中学へ入るのは大学へ入るステップだということはよくわかるのですが、そういうなかでも中学あるいは高等学校独自な同志社教育というものがあるのではないか。いま遠藤先生がおっしゃったように、大学の場合は、女子大学でもそうですが、四年間いるなかで同志社が好きになって、自分の子供は同志社へ絶対入れるんだというようなことを言って卒業していく人がいるわけですね。中学あるいは高等学校の場合は親が、お前、同志社はいい学校なんだよ、と言って送ってくれる、だから学校側が親を啓発させてくれる、ということがもっとあっていい。同志社教育に協力される親がわかっていないのじゃないか、意外に親が問題ではないかと思うのですけどね。

住谷　中学の段階までは、親が同志社が好きでということでやるかもしれないですが、大学の段階では子供はものすごく受験のベテランだから、親はどの大学がどうなのかわからない。受験の選択は、親はあとからついて回るような状況があるのではないかと思うのです。子供のほうがよく研究しているわけです、どの大学へ入ればどうなるということをね。

遠藤　このあいだ、文学部を出たカップルが来て、結婚したいというのです。挙式は同志社のチャペルで絶対やりたいので司式をしてほしいと。クリスチャンでないのですよ、二人とも。男性のほうは一浪して文学部へ入った人、奥さんになる人はストレートに来たのですがほかに志望校があったけれども同志社に入った人です。二人は同級生で卒業するころになって結婚を決意して、結婚式はチャペルでとなったのです。新島先生の肖像画と歴代総長の沢山の肖像画にとり囲まれてね。そのなかで、ぼろぼろ涙を流しているのですね。列席者もほとんどクリスチャンはいなかったし賛美歌もだれも歌えないのでぼくひとり大声で歌わねばならない状況だったのですが、列席者もみなこの式に感激して、同志社はいい学校だというようなことを口々に言ってました。四年間在学して、われわれの教育は不十分だけれども、そういうふうになっていくところがあるのですね。

住谷　同志社人は生涯死ぬまで同志社人なので、あらゆる機会をとらえて――大学でそういう挙式までやれるということは大きな意味があると思いますね。

遠藤　さっき私、一貫教育のことを申しまして、これを話題にしたいと申しましたのですが、そういう精神的なところに立脚して教育の全体が配慮されていなければならない。これは行政や、機構の面においても、そういうものにそった行政であり、組織でなければならないはずですね。

住谷　主客転倒し易いのですね。

武　そういう点でいつも思っているのですが、実は一年間香里中学校にお世話になったことがあるんですけれども、教師の交流といいますか、これは同志社教師のひとつの姿をつくるという意味で、たとえどちらの大学を出て、同志社の教師になっておられようが、また勤務先の所属はそれぞれあるにしても、中学から大学まで、お互いにある一定期間を区切って教室を回って、その教育の実態を体験し経験したいですね。

住谷　同志社はそれがほんとに欠けていると思う。

武　そういうことは私はできると思うんですよ、総合学園ですから。

高松　中・高の評議員会で、いちど人事交流のことが話題に出たんですけど、結局むずかしかろうということで……。

武　どこかで決断して、実験的でもいいからぜひやってほしいと思いますね。

高松　私は中・高で同志社に勤めて三〇年になりますけれども、結局自分でよく考えてみると、公立高校を知らないわけですね。意外に世間が狭いということを感じますね。同じ学内でも岩倉とか、女子中・高とか、中学とか、また国際高校にしろ、日ごろ顔を合わしていながら、その実情を意外に知らないというのが事実ですね。

住谷　三〇年おられても全教員が知り合う機会が少いのですね。

遠藤　失礼ですけど、先生のご担当は何ですか。

高松　数学です。

住谷　専門がちがうとよけい存じあげない。

遠藤　数学関係で、一貫教育的な場所というのはどうですか。

高松　いや、やってないですね。

遠藤　現状においては、いまおっしゃった組合活動と……。

住谷　入試のときです。推薦入学については人文系の歴史関係ですね。ああいうところでは狭い専門分野での共同研究があったりしますね。

遠藤　それから井上勝也さんたちのやっておられる「同志社教育を語る会」とか、そういったボランタリーなものですね。法人には、キリスト教主義教育では基督教教育委員会があって、総長が委員長で、各学校の宗教関係の先生方が出ておられる会がありますが……。

住谷　堅苦しいですな、感じとしてはね。

高松　少しずつ、芽は出てきているんじゃないですかね。

遠藤　動き出しつつあるようには思いますよ。もともと事務連絡の会みたいな形だったのですけれども。

住谷　そういうものが土壌としてできてくると、フォーマルなものになってきますね。

遠藤　この会は年に一回、研修会をやって

います。大てい一泊でね。各学校からの参加者で五、六十名になります。こういったことが各教科でもやれるようになるとよいと思います。キリスト教主義教育と言いながら、だいたいキリスト教教育なのか、キリスト教主義教育なのか、厳密に規定しなければいけないのですが、あいまいなのです。

住谷　私たちもわかりませんね、主義なのか。どうなのですか（笑）。

遠藤　ぼくの理解するところにも、またいろいろ反論はあると思うのですけれども、キリスト教教育といったら、キリスト教の伝道が教育の目標となるわけです。たとえばミッションスクールですね。ミッションスクールといえば、ミッションボードとか教会とか宗教団体が経営する学校。

住谷　教師もクリスチャンでないといけませんね。

遠藤　そういうことはありますね。キリスト教主義教育というと、キリスト教というのはひとつの媒体になるわけです。教育が中心であって、キリスト教が徳育の基本になる。同志社ははじめからこれで、ミッションスクールとちがっていたのです。だから大学の委員会は、キリスト教主義教育委員会なんです。同志社全体のは基督教教育委員会とは称するけれども、べつにキリスト教をもろに出している委員会ではなく、大学のと区別するため便宜上そう名づけられているわけです。

それはともかくとして、曲がりなりにそこでは委員会があり、ひと月に一度、顔を合わせ、一年に一度は研修会をやっているわけですけれども、武先生、どうですか、実質的にはなかなか深まらないでしょう。

武　そうですねえ。

住谷　日本人がもっている宗教観というか、生活のなかでのキリスト教に対しての考え方はさまざまであるし、そのことも背景にありますね。

遠藤　キリスト教といっても理解はさまざまだし、そしてさまざまであるべきだと思う。これがキリスト教、というふうにやられると、ミッションスクール的になってしまいますからね。だからキリスト教の理解はリベラルなものであるべきだ。しかし同志社の共通項というものはあるべきで、そういったものを全体として徳育の根本に置くという、しかしそこら辺をいつも考えて研究して、共通理解を新らしくしていくような、一貫教育のケルンになるような委員会を設置しておく必要があると私は思います。

住谷　それはほんとに大事だと思います。木の根っこみたいなものだから。

遠藤　たとえば基督教教育委員会を強化するとか……。

住谷　根がはっきりしていれば枝葉が実ります。同志社という一本の大きな教育の木を考えるとき、その枝はいろんな専門の分野に分かれているのですが、いまわれわれが大学でやっている分野というのはごく限られています。中学から高校という、学問的にもいろいろ根が生えてくるといまの同志社の大学では受け皿としては狭くなっています。それで、同志社にない専門をオファーしている場合に、そこへ行く生徒も中・高では出てきてしかるべきだと私は思いますけれども、そのところはちょっと矛盾した問題がありますね。

高松　それも以前はわりあい多かったのですけれども、このごろだんだん、喜ぶべきことかどうか、同志社大学志向というのが強くなりました。他大学を受ける生徒が少ないのです。

住谷　それはいいことなのだろうか、悪いことなのか（笑）。

武　両方あるんでしょうね。いいことであると同時に、エスカレーターに乗ったんだから乗っていくんだという、そういう計算が親にあったろうから、子供にそれが反映している。

高松　高校生が自分で大学の学部に合わせていく感じで、新しい面を切り開くというところがちょっと欠けていると思いますね。

八木　自分で何がやりたいというはっきりしたものがないのですね。それも無理ないと思いますけど。

武　私の娘が同志社女子中でお世話になったのですが、中学の父兄会で、もう先生方が大学の話をなさる。そうするとお母さんたちが、みんなまた大学の話をなさる。自分の娘を中学校へ入れて、中学の教育について語り合うというのではなくて、大学の話をされると、それが中心の話題になるのです。

高松　そのときにむしろ真剣になりましてね。

武　それがなにか切り札みたいなことで、ほんとに中学で愉快に楽しくやるというような雰囲気が、少なくとも親たちの会合には見られない。

住谷　上から規制されると、かえって逆に同志社の一貫教育がゆがめられる。個性をいかに伸ばすかというのが逆になってきますね。

八木　さきほど一貫教育で交流ということをおっしゃいましたが、大学への無試験推薦制度があるのですから、中学や高校でもっと独自の教育といいますか、ほかの中学や高校ではやってないようなことがもっとできる余地があるのじゃないかと思うのですけどね。受験がないということを前提とすれば、その間になにか独自のものが考えられないか。もちろんそれには大学も協力を十分にしなきゃならないのですけど、そういう面も一貫教育の実際の内容として考えられるのではないかという気がしますね。

武　大学の協力が八木先生のおっしゃるように必要ですね。その辺、非常に不安です。

住谷　大学は一般の学校の優秀な受験生と同じ勉強の要求をするからね。それでかえって高校の先生方は余計な思惑がはたらいてユニークなものができなくなるのではないでしょうか。

遠藤　たとえば、大学の入試問題を見るとものすごくむずかしくて、ぼくなんか今受けたら不合格ですね。たとえば英語のこんなむずかしい英語の問題をちゃんと解答して入って来るんだけれども、どれだけ実用的にこなしているのか。たとえばしゃべれるか。実用的な英語の第一歩は会話ができるかということでしょう。それができないのじゃないか。フォークナーやシェイクスピアを読めてもだめではなかろうかということも考えるのですがね、これは入試でどんなふうにそこのところを評価できるのか、むずかしい問題だろうと思いますが、中・高あたりで同志社的な教え方、たとえば英語のことでありますけれども、そこら辺が十分こなせるような力を培ってくださっているでしょうか。

住谷　それはそれぞれ、年代によってちがうような感じがします。いまは大変よいのではないでしょうか。

高松　香里でいえば、英語に関しては中学一年から六年間のきっちりしたカリキュラムを組んでましてね。特別に教材をつくり、普

通の教科書はほとんど使ってないのです。香里のほうで特別に英語科の先生が集まってやっております。だいたいしゃべること中心の授業をやっております。

遠藤　そういうファクターが大学で生かせるようにしていくことが肝心ですね。

八木　英語ももちろんそうですが、いまの大学生全体に非常に欠けているのは日本語ですね。日本語の文章が、まともに日本語になってないということがありますね。いまの受験勉強の○×式ばかりやってたら、そういうことになるのかもわかりませんけどね。

高松　私は、共通一次というのは弊害があると思いますね。

住谷　私のゼミにあて字の名人がいて、きみ、よくこれで入ってきたな、と言うのですが、あて字の多いこと、びっくりしますよ。

遠藤　昔もいたけども、最近とくに、そういえば多いですね。

住谷　文章を書くというような機会がないのですね。

国際的な視点の問題も、遠藤先生が問題提起されたように、同志社はわりあい国際交流も盛んで、他に比べれば国際高校もできたことだし、そういうような意味では、日本のなかの同志社というごく小さな大学だけれども広い国際的な視野に立った教育の部面で、それがどういう形にわれわれのなかに生きているのか。同志社は新島先生がアメリカへ国禁を破って行かれたという伝統をもっていて、相当そういう点ではインターナショナルであるべきだと思います。

遠藤　各学校の学則を見ますと、国際主義というのをうたっているのは国際高校を除くと女子大だけです。あとはキリスト教主義を掲げているけれども、国際主義はない。まあ、これは形式的なことで、掲げてなくたって実質的にやっていればいいわけですが。しかし、女子大はその点、キリスト教主義と国際主義という二本柱を強調しておられます。いつごろからそういうふうにやっておられるのでしょうか。それとともに、女子大では国際主義教育を実質的にどういうふうにやっておられるかということが注目されます。

武　私はそういう現実のことについて、はなはだうといので申しわけないのですが、そもそも掲げたというのも、歴史的な女子教育のひとつの背景があると思うのですね。日本においてキリスト教の女子教育というのはパイオニアといいますか、いい意味でエリートというか、人間解放というような意味です。国家とか古い権力から解放されたところで、ほんとに人権意識をもったひとりの人間としての女性を育てていこうという点では、当然国際的な立場で、宣教師たちの信仰とか情熱とか、また体験とか、おもにこれはアメリカのピューリタニズムの影響だと思いますけれども、新島先生はいろんなところで講演したり説教したりするなかで、女子の人格を本当の意味で認めていかなければ日本はだめだということを言っておられます。ですから、たとえばデントン先生みたいな方がおられたということもあるのではないでしょうか。

遠藤　あの学則は新制大学になるときにつくられたのでしょうが、伝統的にはずっとさかのぼれるものでしょう。

武　学長(英文)のヒバードさんや、音楽のクラップさんとか、皆さん宣教師ですね。

遠藤　その影響があったのでしょうね。国際主義というのはおっしゃるように、人権尊重とつながりますね。それのひとつのあらわれとして、外国人を差別しないということ

と。そこから国際主義という理念は基本的には出てくる。それが大学その他の中・高になると、国際高校はこれは非常にはっきりしていますけれども、どの程度実質化されて内実化されているかというと、お寒いことじゃないでしょうか。

住谷　教育のなかに、そういう視点がどこまであるのかということですね。

遠藤　これはやはり新島先生が生きておられたら、さびしい思いをなさる点じゃないかと思うんです。京大には留学生が同志社にいる外国人学生の一〇倍以上おりますね。本部に国際主幹室があり、学生部に留学生課というのがあり、宿舎も二つ持っている。

武　こんど修学院に大きい寮ができますね、二〇〇人近く入れるそうです。

遠藤　京大の場合は文部省がやっているわけですから財政的に必配することはない。同志社ではなんといったって基本的なところが充実していかないと、そういうところまで手が届かないということはあるのでしょうけども、同志社のいちばん基本になっている精神的な面をしっかり充実させて、それを具体化していくようなことをあわせて考えていかないと、看板は掲げているけれども、実質はほかの学校よりもお寒いというのでは情ない。

住谷　アーモスト大学だけですね、同志社がうまくやっているのは。ほかは広がらないですね、上智大学のほうがずっと手広いでしょう。

遠藤　留学生受入れの構えは一応できたけれども、実質的には各学部も女子大も積極的とはいえない。

住谷　実際われわれが留学生を大学院で受けとめても、ものすごく時間と労力がかかるわけです。

遠藤　われわれの方は外国でものすごくお世話になっている。言葉も十分にできないものを受け入れてもらって、奨学金をもらって勉強したという人々が、同志社の教師のなかにはたくさんいるわけでしょう。それが同志社のほうでは逆なのですものね。

住谷　それだけ時間と労力をかけてみたら、その学生は忘れませんね、それだけ国際的な信頼関係が深くなります。ひとりの留学生を真実、面倒をみればそれだけ国際交流は深まるということだから、その努力はすべきだと思いますね。

武　このあいだ同志社新島研究会の集まりで岡本先生とお話してたのですが、アーモストにニコルズさんという方がおられたんですね。非常にすばらしい青年で、クリスチャンで、その遺志でアーモスト館の現在があるわけなんでしょうけれども、それから私はハワイ寮ですが、ハワイ寮もリチャードさんという方ですね。昔の同志社の学長の大下角一先生もそこで学ばれたわけですから、アーモスト館とかハワイ寮とか、私もお世話になったひとりとして、同志社らしい国際寮に早く復帰してほしい。京都大学よりずっと早くから国際的なそういう寮をもったりしておりながら、結局はおくれてしまったともいえます。これは学寮問題という別な問題があるので一概に言えないんでしょうけれども……。

住谷　もっと積極的に門戸を広げたほうがいいですね。

遠藤　いま日本の大学で勉強した東南アジアの留学生が、自分の国へ帰ってたいへん反日的になってやっているという事実がある。大学の教育の現場で人権というものをしっかりふまえたうえで国際主義を確立して、そこで受け入れて教育していくということであれ

ば、そんなことにはならない。たとえ日本社会の風潮からそういうことを感じても、あの大学ではほんとに大事にしてもらった、いい勉強ができたという思い出で帰ればそういうことにならない。ぼくらだってアメリカやらヨーロッパで勉強している間に当の国に対して一定の批判はもったけれども、一辺倒的に反米とか反独とか、そんなことにはならない。やはりきちっと護ってもらった人間として大切に扱ってもらったという、そういう豊かな気持が根底にありますね。

武　それはこのなかで、そういう人権意識をもたなきゃいけないんですけれども、それにはやはり教育の話ですから、たとえば同志社大学を卒業する学生がアフリカとか韓国とか、あるいは日本の被差別のなかへ入っていって、そういうなかでまさに同志社スピリットを生かして〝地の塩〟のはたらきをしていただくことです。そういう人をどんどん送り出すべきで、かつてアーモストのニコルズさんが来たり、あるいはハワイの平和奨学基金で教会の関係者が来たり、行ったりし、またいろんな宣教師が来た。こんどは日本から、いろんなところへ行って奉仕する学生を積極的に生み出すようになれば、おのずから一切差別なしの開かれた学園になります。そういう人間がいまほんとに必要なんですから、いたずらに日本の成長企業にばかり行く人を育てるのが同志社でなくていいと思うのですね。

住谷　それが今日の教育の本当のテーマですね。これからの同志社の展望ということにかかわることなので、そういう方向があっていいと思います。

八木　最初に遠藤先生がおっしゃったことと関係しますが、立身出世というか、自分だけの栄達をねがうというような人間でなくて、社会の下積みで奉仕するような、そしてそのなかにほんとに生きがいを感じるような人間をつくり出す。いい成績で卒業して一流企業へ行けばいいというような学生は、面白くないですね。

住谷　しかし、そういうニュアンスをもって中学に入ってくる(笑)、そこから始まるのですから、イメージ・チェンジをしないといけない。

武　親から同志社教育が必要になります。

高松　うちの学校の生徒をほめるわけじゃないですけど、意外にうちの生徒は、日本人以外の人を区別するというような考えに、いい意味で意外に乏しい。ちがう人だというふうな意識が少ないというのはありがたいと思いますね。いろんな国籍の人とつき合うことで、それだけ人間はどんどん大きくなっていくと思うのです。ちがう国籍の人は、やはり日本人と考え方の基準がちがうところがありますから、そういうものに対する理解が深まっていくというか、人間の成長にいちばん大事なことだと思いますけれども。

住谷　われわれは案外、国籍のちがう人と接するチャンスが少ないし、日本人というのは非常に視野の狭い単一民族ですね。これからは多国籍社会を学ぶことが大切ですね。

武　アジアでもアフリカでもそうですが、国際的な奉仕団体というのはキリスト教関係の団体が多いのですね。そういうところへ同志社が今まで以上にイニシアティブをとって人を送り出していく、そういう学園になるのが望ましいです。

住谷　各国に開かれた大学になるには、まだまだむずかしい問題を抱えていて、その体制づくりはできていませんね。

遠藤　武先生が、教師論が大事だとおっしゃったでしょう。いままで論議した問題は、みんなわれわれに返ってくるわけですよ。論議の対象は学生であり、社会であり、家庭であり、親であるのだけれども、同時にわれわれはどうかということを感じますね。国際主義の問題にしても、われわれ自身の人権意識はどうなのか、ということを問われるわけですね。西欧の人たちに対してはある種の劣等意識をもち、そうでない人たちに対してはその逆の場合があるといったことがないだろうか。いま国立大学でも外国人教師を採用する傾向ですね。

住谷　なにしろ言葉の障害というのが大きいでしょう。われわれ韓国の人と接していると、韓国の人は日本語と韓国語を流暢にしゃべります。二カ国語がやれるわけですよ。私たちはやれません。身近な隣国の言葉を知りません。隣国の文化も、まず教えることから初めるべきだと思いますね。

遠藤　韓国語は第二外国語にないですね。

二年前にぼくは大学のグリー・クラブを引率して中国に行ったでしょう。第二外語で中国語をとっていたのは五〇人のうち、二人しかいなかったのです。あとはドイツ語、フランス語などで、中国語はわずか二人です。その二人が頼みの綱でね(笑)。そういうていたらくですよ、隣の国の言葉が。韓国語の場合、もっとわれわれは知らないわけですね。

住谷　そこからわれわれの考え方を変えていかなければいけませんね。

八木　いまの大学院の入学試験でも、いつもそう思うのですよ。英・独・仏はもちろん必要ですよ、しかしそれ以外のものは入ってないでしょう。ロシア語ができるとか、中国語ができるといった学生をもっと評価してもいいのではないか。それで本当に国際的ということになると思います。

住谷　もともと同志社は東洋の諸国との文化交流があたりまえのことだったのが、ゆがめられてきたわけでしょうね。東洋を飛び越して西欧文化を中心にする大学になってしまった。これからの同志社教育を考えるときにはもう一度、原点にかえるというお話があったのですが、私たちが立ち返ってみる今日的な原点を見極めてみたいですね。たとえば、同志社の女子教育の問題を国際主義に立って考えてみるとき、キリスト教主義の学校は女子教育に非常に熱心で、女子専門の学校はほかにもありますね。世界的にはどうなのでしょうか。女子教育は歴史的には大いに意味があったのだけれども、国際主義というものに立っている各国の女子教育の現状というのは、やはり女子教育だけでやっているのでしょうか。

遠藤　アメリカでいえば、名門女子大のウエルズリーとか、ヴァッサーとか、スミスとかいうのはみな共学になっているのとちがいますか。アーモストみたいな男子の名門校も共学になりましたね。全体的に共学がふえてはいますね。

武　同志社の女子大は他の女子大とちがって、それ自身がかなり共学的な雰囲気をもっています。たとえば聖和女子大が聖和大学になった。東京のほうでも鶴見とか仏教系の女子大が共学になっている。やはり学問に国境も性の差別もあってはならないし、もちろん教育にもあってはならないので、女子の高等教育を特別に取り扱ってきた歴史的な事情は、いままでの日本の問題としてはあったと思うのですけれども、いまはそういう時代でなくなっている。またあってはならないわけ

ですから、男尊女卑とか、非人権的な風土、国家権力やさまざまな日本的な精神的権威やそういうものによって支えられてきたことが、いま完全ではないにしても、解放されてきつつあるし、ある意味では、そういう点で何か今後は不安をもってますね。同志社女子大学がどこまで時代のニードに応えていっているのだろうか……。

住谷　女子大として、学生はどんどん集まるわけですしね。

武　これはまた別な理由のようですよ。娘をもった親——とくに父親ですけどね——やはり女子大にお願いしておけば安心だという……。

遠藤　日本的状況というべきでしょうか。

住谷　そういうムードがあるかぎり、女子大は安泰なものです。しかし、それは、教育の理念とはだいぶちがう。その矛盾があるわけです。

武　たとえば音楽学科があるし、あるいは食物学科があったり、英文学科もありますけど、食物学とか、音楽はなおのことですが、やはり共学でやっていくことが、技術的にもさることながら、教育的にも、社会的な意味からでも大きいと思います。いま高等学校でも男子の生徒が家庭科をとるのでいろいろ運動がございますね。

住谷　これから生きていく人間は、従来の女の役割、男の役割というものにこだわっていたら生きてゆけないと思う。男女とも同じ人間として生きていく。家事労働も男がやるし、女も社会活動をやる。教育はこれからの厳しい生活にちゃんと適応して生きていけるだけの人間をつくらないといけないわけだから、教育の現場がへんに仕分けされていると、ひ弱い人間しかできないと思います。それが家庭崩壊を誘発します。

遠藤　逆に言いますと、香里は男子だけでしょう。男子だけの教育というのが、教育の理念から言って必然的なものがあるかどうかという問題はどうでしょう。

住谷　同じことですね。

遠藤　まあ、同志社は、共学の大学があり、女子大があり、男子高校・中学あり、女子中・高あり、共学の中・高あり、国際高校あり、バラエティーがあって、志望者はそれぞれ好きなところに行く。それぞれ特色があって面白いのじゃないかと思うのですけどね。

住谷　同志社全体でみたらいいかもしれませんが、しかし教育の理念ということからいくと、矛盾をつくっていますね。

武　大学のレベルで言えますね。

遠藤　男子だけの大学とか女子だけの大学とか、それだけだったらおっしゃるようなことがあるけれども、同志社教育というのは全体的なもので、同志社という大状況のなかにそれぞれの学校が同じ教育理念のもとにあるわけで、また、先生たちの間にもある程度交流があるでしょう。

住谷　それがしかし限られている。まだまだタコつぼ的です。オール同志社から見たらいい要素をたくさんもっているんだから、もっとお互いに交流し合って、学生も交流し合うし、先生方ももちろん交流し合う。ここは男子禁制だとか、女子禁制だとかいうのがあるだけで、そんなものは外して、お互いにカリキュラムを交換し合ってもいいと思います。

遠藤　英文科は両方あるでしょう。どの程度交流があるんでしょう。

武　昔ほどはないと聞いています。

住谷　これからよくなる土壌はもっていると思うのだけれども、実際にはそれを閉ざしています。

遠藤　先生の交流はまああるとしても、学生は相互に聴講できるんですか。

武　今はできないですね。しかし現実には同大の女子学生が、女子大の授業を聴きにきているということは、音楽とか食物とか何かにあるようですね。

住谷　盗聴か、それは。

武　案外、これらが未来を拓くことに——(笑)。

高松　担当の教授なんかに断りなしに行くわけですか。

武　大学等の場合、そうですね。正式にはお断りすべきですが、人数が多いからわからないという……。

遠藤　ぼくは音楽が好きなので、こっちの大学も美学や文化史の学生や音楽の好きな学生がたくさんいるから、女子大の音楽科の聴講をさせてもらえたらいいだろうと思うけれども、雰囲気を壊しますかな。

武　いや、そんなことも……。

住谷　壊すし、そしてものすごく授業料が高い。だからそう簡単じゃないと思うのです。

遠藤　だんだん結論に近づいていますから、もうちょっといい面を話し合いましょう(笑)……。

住谷　いや、もっと悪い面もあると思います。そういう悪い面をパッとさらけ出さないとよい面がむしろ、わかりませんね。

武　全体的に見て、やはり同志社学園のなかで発展すべき未来のことでいちばん問題をもっているのは学内の二つの大学だと思うのですけれども、中学・高等学校からときたま転出して大学のほうに入ってこられる先生がありますけれども、それぞれ専門があるわけですから詳しくはわかりませんが、中学・高校で六年間生徒と一緒に礼拝をしてきたり、なにかそういう同志社教育のひとつの雰囲気をもった先生が多い。従来の大学の先生と比べますと。なにもそれがすべて同志社教育だとは思いませんけれども、しかしそれが大事な中心的なものとすれば、そういう点で同志社大学も女子大学も、そういう雰囲気ですすんで協力して下さる先生たちを必要としているのですね。

ですから、さきほど遠藤先生がおっしゃいましたように、総長が招集する基督教教育委員会なんかがもっと貢献して、全同志社の教職員たちの対話や研鑽や建議などができるというものになっていなければだめではないか。これからの私学同志社をどういうふうに、どういう生徒・学生を育てようとしているのか、社会に対してどういうふうに応えていこうとしているのか、一人一人の自覚を危機の意識をもって促されないと。私もそうですが、とくに多くの大学の先生方の胸を総長はたたいてまわられるということがあっていい。

住谷　総長にたたいてもらうのじゃなしに、われわれ自身がたたいていくことですね。教育というのは自己変革だと思います。教育する側も、自分自身が変革しなければできない。

遠藤　住谷先生の言われるのはよくわかるのですが、みんなの責任だと言ってしまうと、問題が拡散してしまうわけでしょう。みんな大事だ大事だと思っていながら、注意が集中しない。みな忙しいですからね。だから、いつもそういう基本的な根本的な問題を

考えているところが欲しい。それはさっきの基督教教育委員会でも何でもいいんですけれども、総長はそういうことを考える責任者ですね。教学の責任者として。その下にしっかりした機構を考えてほしいと思うのです。もっとも、そこが固定してしまうと弊害が起こりますから、いつも入れ替わり立ち替わりいろんな人がそこへ入って、同志社全体の教育の根本的な面でかじ取りができるような部署というか、委員会というか、そういうふうなものがあってしかるべきだと思うのですよ、これだけ大きな教育団体でね。それがいっこうはっきりしない。

住谷　そういう基本的な問題をみんなが自由に語れる場ができるように、開かれた同志社教育の専門性というか、そういうものがあってもいいでしょうね。

武　「同志社時報」のずいぶん前の号でしたけど、卒業生で、桜美林大学の学長をされている清水安三先生が、同志社を分解して、田辺と今出川を使って同志社神学大学、同志社音楽大学とかいろんな名前が書いてありましたけれども、そういうふうにして組織的に編成替えしてみたらどうかというようなご提案があったので、私は非常に啓発されたのですが、先生たちはどんなふうに思われますか。

遠藤　昔は大学といえば専門大学です。文科大学とか、法科大学とかがあって、総合大学を形づくっていった。それらが後に学部制になった。同志社の場合は両大学とか各中・高・幼稚園が独立の独自な教育をやりながら、しかし全体としてのインテグレーションのある――そうでないと同じ志の社にならないわけで、だから神学大学、音楽大学などとして独立させたあと、どうするか。ここが大事ですね。何をもって統合するか。

住谷　そうですね、ばらばらな状況ができるのだから。大学のなかは各学部が独自性を発揮していますが、まずそこに横穴をあけて、交流できる場をつくっていくことが肝心ですね。

八木　学生はどの学部のどの科目だって好きなものを履修できるというのもひとつの構想だと思いますね。べつに最初から工学部とか文学部とか限定せずに、なんの科目を履修したかによって、卒業のときに工学部卒業とか文学部卒業にしてもいいわけです。もちろん、そう簡単にはいかないでしょうが、そういう自由さというものが一方ではいいと思いますね。

住谷　専門教育という形のコースが内部に設定されればよいわけです。

八木　そこの兼ねあいがむずかしいところですね。

住谷　教育の問題というのは、いろいろと各学校の事情もあるし、とくに価値の多様化している時代にもなってきましたからね。幸い同志社はよき伝統がありますが、しかし、伝統の上にあぐらをかくというような学校であってはならないと思うのです。大きくなると、どうしても各部署でどっちを向いているかわからないような状況ができてくるので、その辺をどう改革しながらインテグレートしていくかという、そういう話し合いの場をそれぞれもっていく必要があると思うのです。語ればきりがないようですが、本日はこれで終らして頂きます。

（一九八一年・七月九日・於有終館担当理事室）